

令和4年度老施連
事例研究発表会
【動画発表】

公益社団法人広島市老人福祉施設連盟

《もくじ》

○開催要綱	1
○第53回中国地区老人福祉施設研修大会大会概要	5
○発表事例一覧	6
○抄録原稿	7
分科会①（特別養護老人ホーム）	8
分科会②（養護老人ホーム、在宅サービス）	15
○審査員一覧	21

令和4年度老施連 事例研究発表会【動画発表】 実 施 要 項

1. 趣 旨 施設内で取り組んでいる研究や活動を発表することにより、広島市内の老人福祉施設等の利用者の処遇及び従事者の質の向上を図ることを目的とします。また、令和4年度開催の第53回中国地区老人福祉施設研修大会事例発表における広島市代表選考も兼ね開催します。

2. 実施方法 発表動画のオンライン配信
(予め発表者が各自撮影した動画をYouTubeで限定公開)

3. 主 催 公益社団法人広島市老人福祉施設連盟(企画運営:研修部会)

4. 動画配信期間 令和4年6月1日(水)～9月30日(金)(予定)

5. 参加対象 発表者:広島市老人福祉施設連盟加盟の施設・事業所の職員
視 聴:どなたでも

6. 発表数 全13事例(別添 一覧の通り。)

発表種別	事例数
特別養護老人ホーム	7
養護老人ホーム	1
在宅サービス	5

6. 内 容 等 中国地区老人福祉施設研修大会に準じた分科会種別及び別紙1発表要領に基づき抄録原稿並びに発表用スライドを作成し、PowerPointを用いて発表します。(発表時間15分以内)
審査については、別紙2評価基準に基づいて、広島市老人福祉施設連盟研修部会担当施設長が行います。
施設種別毎に推薦枠数を設定し、それぞれ優秀な上位事例を中国大会に推薦します。(推薦枠数は別添「第53回中国老人福祉施設研修大会概要」をご覧ください。)
また、動画配信のため質疑応答は行いません。

7. その他

- ・審査員は分科会(施設種別)に分かれて、老施連研修部会担当施設長が担当します。
- ・審査結果については、6月17日頃各施設宛に通知します。

8. 今後のスケジュール(予定)

期 日	内 容
6月1日(水)	動画配信開始(～9月末頃まで)
6月1日(水)～13日(月)	審査員による動画視聴・審査
7月1日(金)	中国地区研修大会への動画提出〆切
8月1日(月) ～10月31日(月)	中国地区研修大会における動画配信開始

お問い合わせ／公益社団法人広島市老人福祉施設連盟 事務局
TEL: 082-207-0567 FAX: 082-207-0576
Mail: info@roushiren-hiroshima.jp

令和4年度老施連 事例研究発表会 発表要領

◆発表用データ・抄録原稿の提出について

- ①抄録原稿は、配布資料として公開します。発表者は必ず次の要領に従い、提出をお願いいたします。
 - ②発表内容が法律違反といったことがないよう、事前に発表者の責任で制度確認を行ってください。また、現制度では規制されているが、ご利用者のために必要であるというような内容は、規制緩和、制度提案の形で積極的に発表ください。
 - ③発表する研究や取り組みが、調査研究中または継続中で、完了していなくてもかまいません。
 - ④利用者の名前・写真等を掲載する場合、個人情報保護法の観点から、必ずご本人またはご家族の承諾を得てください。
 - ⑤発表データ・抄録原稿の差し替えは、資料印刷及び当日進行の関係上、締め切り後は受け付けできません。
 - ⑥提出にあたっては、すべてデータベースでの提出とします。(紙媒体・PDFでの提出は受け付けません。)
- ※発表内容及び提出データについては、倫理委員会等第三者による検討・承認がなされていることを推奨します。

◆抄録原稿の書き方について

- ①抄録原稿は、別添様式1に従い作成し、1演台につきA4サイズ1ページとします。
- ②抄録原稿は手書きではなく、必ずパソコンを用いて入力してください。
- ③抄録原稿見本のフォント(書体)やポイント(字の大きさ)、上下左右の余白(ほぼ20mm)等、様式のページ設定を変更することなく、記載にしたがって作成してください。色は黒一色とします。
- ④本文の文字の大きさは、9ポイントで記載して2段組(左右の2段に分ける)としてください。
- ⑤取り組みと最も関係のあるキーワードを必ず3つ重要度順に記載してください。
- ⑥抄録の構成は、様式1の内容を参考に、Ⅰ.<取り組み課題>Ⅱ.<具体的な取り組み>Ⅲ.<活動の成果と評価>Ⅳ.<今後の課題>Ⅴ.<参考資料など>で構成し、章の区切りにこれらの表題をセンタリング(中央揃え)で入れてください。
- ⑦使用する参考文献等は確実に記載し、また、許諾等が必要なデータ等についても、その手続きが完了している旨を記載してください。(特に、個人情報や著作権が含まれるもの)
- ⑧文書表現はできるだけ簡潔に記載してください。

◆当日発表用データの作成について

- ①抄録原稿とは別に、発表用データを作成してください。
 - ②発表に使用するOSはWindows7以降で作成したパワーポイント2010以降のバージョンとします。また、Windows vista・XP、Macintosh等で作成したデータについては対応できませんのでご了承ください。
 - ③スライド枚数は発表時間を踏まえ、15～20枚程度(1スライド1分以内)が妥当です。
 - ④スライド内に音声または動画がある場合は、その旨を連絡ください。(再生ソフトによっては対応致しかねます。)
- ※動画や音声の使用は、あくまでも取り組みの内容や効果等を伝える際に補足するものです。
- ⑤当日発表に使用するパソコンはネット接続をしておりません。
 - ⑥発表用データを提出する前に、作成時とは別のパソコンで映像等の確認をしてください。
 - ⑦本発表会は、他の施設・事業所及び職種に公開します。発表に用いるデータや用語等は客観的に理解しやすいものを使用してください。
 - ⑧スライドは会場全体や画面上で見やすい色やフォント・文字の大きさとなるよう作成してください。
 - ⑨スライドに使用する参考文献等は確実に記載し、また、許諾が必要なデータ等についても、その手続きが完了している旨を記載してください。(特に、個人情報や著作権が含まれるもの)

※発表動画の撮影については、別添の「撮影要領」をご確認の上、各自収録し提出してください。

◆データの提出について

- ①申し込み専用Webサイトより、データをアップロードして提出してください。アップロードできるデータ容量は、最大100MBまでです。容量を超える場合は、ギガファイル便等にて事務局まで直接メール送付してください。
- ②申し込み及びデータの提出についてご不明な点などございましたら、事務局までお問い合わせください。

申し込み・データ提出締め切り：令和 4年 5月 20日(金)※厳守

令和4年度老施連 事例研究発表会【動画発表】 評価基準

《趣 旨》

この基準は、老施連 事例研究発表会において、日々の介護現場における実践研究を発表していただくことで、視聴者が各施設において実践していくことができる効果の高い発表を評価するものです。

本基準に基づいて採点評価を行い、中国地区老人福祉施設研修大会分科会発表において広島市代表として推薦する事例を選出します。

《評価基準の概要》

次に挙げる9項目を各5点満点で採点を行い、その合計点を最終評価点数として、点数の高いものから順に選出します。

同点の場合には審査員による協議（投票・採決を含む）で決定します。

発表時間（動画の再生時間）は15分以内とします。

1. 企画力

- ①目的設定から、実践～結果～考察が一連のプロセスとして明確に表現されている。
- ②抄録原稿に、取り組みと関係の深いキーワードが記載されており、内容の把握が視聴者にとって容易である。
- ③発表資料で箇条書きやグラフをうまく使い、視聴者が理解しやすいよう工夫がなされている。

2. 発表力

- ④抄録原稿と発表資料の説明が統一されており、視聴者にとって見やすい内容である。
- ⑤発表態度（声の大きさや速さ、説明の仕方等）が視聴者にわかりやすい。
- ⑥発表内容のポイントを押さえた簡潔な話である。

3. 応用力

- ⑦発表内容が他施設においても参考となるものである。
- ⑧科学的根拠に基づいて分析・考察がなされ、現在の高齢者ニーズに応える内容である。
- ⑨分析に基づいて、次の段階に結びつく適切な考察がなされている。

<p style="font-size: 1.2em; font-weight: bold;">分科会場</p> <p>※主催者が記入します。</p>	<p style="text-align: center; font-weight: bold;">演 題（右詰め 16p 下線あり）</p>
<p>キーワード1 12p</p> <p>キーワード1 12p</p> <p>キーワード1 12p</p>	<p style="text-align: center; font-weight: bold;">サブタイトル（右詰め 13p）</p>
<p>広島市（○△□）区 12p</p>	<p style="text-align: center;">（施設種別）施設名（右詰め 12p）</p>
<p>職種 発表者氏名（左詰め 12p）</p>	<p style="text-align: center;">共同研究者 氏 名（右詰め 12p）</p> <p style="text-align: center;">共同研究者 氏 名（右詰め 12p）</p>
<p>E-Mail Address もしくは FAX 番号（右詰め 12p）</p>	
<p>施設（事業所） またはサービスの 概要 10p</p>	<p>市町村状況説明、環境を含む施設説明、実施サービス説明等はここに記載し、本番の発表ではこれらのうち課題の理解に直接重要な関係を持たないことは省いて、演題に関わる説明に少しでも多くの時間を割いてください。10p</p>
<p>※以下 9p</p> <p style="text-align: center;">Ⅰ. <取り組み課題></p> <p>ここでは、今回の取り組みをはじめるきっかけとなった状況や、抱えていた課題を具体的に記載してください。箇条書きにできれば、理解しやすいと思います。</p> <p style="text-align: center;">Ⅱ. <具体的な取り組み></p> <p>問題解決のための取り組みの具体的な内容 <対象者、その割合と理由、取り組みの具体的な手法、取り組み時間や期間、取り組みの手順、取り組んだ職員数や構成、部所間の連携、必要とした道具や費用など、活動成果を出すポイントになった点> を記載してください。</p> <p>特に、費用や必要な時間は、他の方々が取り組む際の参考になるように、分かる範囲で積極的に記載してください。</p> <p>また、できるだけ箇条書きで記載するようにしてください。</p>	<p style="text-align: center;">Ⅲ. <活動の成果と評価></p> <p>今回の取り組みの成果をなるべく箇条書きで、極力具体的な数値を示して記載してください。</p> <p>また、成果や取り組みに対するご利用者の反応、自己評価（うまくいった、失敗だった、このような所が足りなかった）なども、積極的に記載してください。</p> <p style="text-align: center;">Ⅳ. <今後の課題></p> <p>今回の取り組みの成果を踏まえ、今後さらにどのような取り組みを行うかを記載してください、事例によっては、「この取り組みは終了」というのでも構いません。</p> <p style="text-align: center;">Ⅴ. <参考資料など></p> <p>この事例と同様の取り組みを行おうとした時に、参考とすべき資料があれば記載してください。</p>

第53回中国地区老人福祉施設研修大会概要

【開催方法】 オンライン開催（録画配信）

【主催】 中国地区老人福祉施設協議会・（公社）全国老人福祉施設協議会

【企画・運営】 広島県老人福祉施設連盟

【配信期間】 令和 4年 8月 1日（月）～ 10月 31日（月）

【事例発表】 動画発表

区分（種別／テーマ別）

施設 ケア	○施設ケア ◆口腔ケア ◆認知症ケア ◆看取り ◆常食化 ◆機能訓練（リハビリ） ◆医行為 ◆災害、コロナ対策 等
	○経営課題 ◆福祉人材確保・育成 ◆ICT・ロボット活用 ◆処遇改善 ◆外国人材活用 ◆入居者確保 ◆多職種協働 ◆業務改善 等
	○地域福祉 ◆地域支援事業 ◆被虐待高齢者対応 ◆生活困窮者自立支援 ◆中間的就労 ◆地域共生社会への取組み ◆保険外サービス展開 等
在宅 ケア	○地域の福祉拠点としての在宅サービスの提供 ◆機能訓練特化の取組み ◆居宅介護支援事業所の運営 ◆災害、コロナ対策 ◆生きがいと社会参加 ◆デイサービス、ショートステイの運営 等

《広島市からの推薦件数》

特別養護老人ホームから 6事例

養護老人ホームから 1事例

在宅サービスから 2事例

※その他詳細については、後日改めて通知。

令和4年度老施連 事例研究発表会【動画発表】発表事例一覧（全13事例）

分科会①：特別養護老人ホーム

No.	タイトル ～サブタイトル～	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
1	出会いと食事は健康の源 ～いつまでもきょういくときょうようを～	特別養護老人ホーム慈光園	管理栄養士	中津 貴子
2	「お母さん、長生きして良かったね」と言われるケアを目指して ～ご家族と共に迎える看取り～	特別養護老人ホーム慈光園	ケアワーカー	阿部 良太 山下 美知子
3	科学的介護を実践し得る施設であるために ～LIFE奮闘記～	特別養護老人ホームなごみの郷	施設ケアマネジャー	中村 静香
4	離床センサー導入による転倒予防 ～のぞみ園においての成果と課題～	広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園	介護員	藤田 誠司 今井 春香
5	大切なあなたへ ～ユマニチュードで絆を結ぶ～	広島原爆養護ホーム倉掛のぞみ園	介護員	平本 朋子 山下 あずみ
6	コロナ禍でも家族との繋がりを ～利用者の笑顔のため私たちにできること～	特別養護老人ホームなごみの郷	介護福祉士	大植 美沙
7	災害時に電子記録システムを活用するために	広島原爆養護ホーム神田山やすらぎ園	介護員	藤井 玲廣 大出 拓也

分科会②：養護老人ホーム、在宅サービス

No.	タイトル ～サブタイトル～	施設・事業所名	発表者職名	発表者氏名
1	記録のデジタル化 ～働きやすい職場環境を目指して～	養護老人ホーム上安慈光園	生活相談員	松田 伝史
2	「昔とった杵柄で」いつもの私 ～誰かが呼んでるよ～	グループホームじこう	ケアワーカー	立上 智津 上岡 良子
3	五感で触れる時間の共有 ～ホットー息つける入浴を～	慈光園訪問入浴介護事業所	ケアワーカー	金田 修司
4	スキンケア予防へ向けた意識改革 ～入居者が安全・安心に過ごせるために～	グループホーム なごみの郷亀山	介護福祉士	田中 愛美
5	動けるようになって地域活動に参加したい！ ～本人の目標を叶えるために～	悠悠タウン基町訪問看護ステーション	理学療法士	齋藤 花菜
6	いざ！という時のために ～チームで支える防災～	上安慈光園訪問介護事業所	介護職員	吉村 小春

抄録原稿

① — 1		出会いと食事は健康の源	
引き籠り予防 地域との繋がり 食から健康		～いつまでもきょういくときょうようを～	
広島市 安佐南区		特別養護老人ホーム <small>じこうえん</small> 慈光園	
管理栄養士 <small>なかつ たかこ</small> 中津 貴子		共同研究者 地域貢献担当 西山和彦	
E-Mail Address : jikoukai@jikouen.jp Fax 番号 : 082-878-8037			

施設（事業所） またはサービスの 概要	昭和 30 年 8 月開設。特別養護老人ホーム、他 7 事業所を併設。法人の基本方針の一つ「地域福祉に貢献する」を念頭にサービスを展開しています。新たに、令和 2 年 4 月より男性単身高齢者のコミュニティの場「じこうネット」を新設。		
<p>I. <取り組み課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現在、地域に男性限定の社会参加の場が少ない。 ・特に男性は引き籠りがち、人との繋がりが少ない。 ・自宅での食事が偏っている可能性がある。 <p>以上のことから、多職種が協力して、</p> <ul style="list-style-type: none"> ●外出のきっかけ作り→地域との繋がり場の提供 →孤立の解消に繋がる様にアプローチをしていく。 ●高齢期の日々の食生活の大切さ、食事の楽しさについて、利用中に伝えていく。 <p>II. <具体的な取り組み></p> <p>【目標】</p> <p>[1] お弁当の提供、野菜作りにより、外出の機会を作る。</p> <p>[2] 担当職員との対話による繋がりを作る。</p> <p>[3] 食事の状況を聞き取り、栄養指導をし、フレイルの予防に繋げる。</p> <p>【期間】 令和 2 年 4 月～令和 4 年 5 月</p> <p>【対象者】 地域の単身高齢者 60 歳以上（孤立しやすい年齢層）</p> <p>【方法】『じこうネット』の新設</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お楽しみ月、木曜ごはんのスタート 対応時間 15 時～17 時 当園へお弁当を取りに来て頂く お弁当 300 円（おかずのみ） 主菜は選択食（肉 or 魚）アレルギー対応 メッセージカード付き、相談窓口対応 ・行き場の提供（野菜作り） ⇒コロナ禍の為、開始を延期 <p>【経過】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開始をするにあたっての会議を開催。 課題を解決する為の方法を決める。お弁当を提供する事にし、量や内容については試食を行う。民生委員、担当職員、回覧により地域に広報を行い、利用者を募る。開始当初の利用者数 7 名。 ・3 か月後、アンケートを実施。（6 名実施） 	<p>献立や量について→丁度よい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性からの依頼もあり、R4 年 3 月～提供開始。 ・在宅での食事について、聞き取りをする。 個々人のニーズに合わせた栄養指導。 【M様 85 歳 男性】（減塩食工夫、低栄養予防） 【H様 83 歳 女性】（栄養バランス、活動の案内） ・月日の経過とともに、担当職員と他愛もない話をして帰宅されている。 ・お楽しみメッセージカード（月 1 回→毎週更新） ・受け渡し時間になっても来られない時の対応→安否確認についての体制作り。 ・自治会長と民生委員との情報共有の継続。 <p>III. <活動の成果と評価></p> <ul style="list-style-type: none"> ・R4 年 5 月現在、利用者は 12 名に増加。 利用者より、「1 日、誰とも話さない日もあるが、ここに来れば話しが出来る。」と声あり。当園にお弁当を取りに来て頂く事で、外出と対話の機会が増えている。 ・食事については対話をした事で、ご利用者の状況を知り、改善の提案が出来た。 ・この度の取り組みによって、職員も以前より地域の方との関わりが増え、地域に目を向ける意識改革に繋がった。 <p>IV. <今後の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・繋がりがなく孤立している方への新たなアプローチをする。 ・継続的に個々人に合わせた栄養指導をする為の場作りが必要である。 ・行き場作りの「男性の野菜作り」の開始の検討。 <p>V. <参考資料など></p> <p>広島市健康福祉局高齢福祉部地域包括ケア推進課 （10 食品群のチェック表） 公益社団法人日本栄養士会（健康増進のしおり）</p>		

①— 2	<u>「お母さん、長生きして良かったね」</u> <u>と言われるケアを目指して</u>
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">3者の想い</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">想いの実現</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">不安から自信へ</div>	～ご家族と共に迎える看取り～
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">広島市安佐南区</div>	<small>とくべつようごろうじん ほーむ</small> 特別養護老人ホーム <small>じこうえん</small> 慈光園
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">ケアワーカー <small>あべりょうた</small> 阿部 良太</div>	山下 美知子
E-Mail jikoukai@jikouen.jp FAX 番号 082-878-8037	
施設（事業所） またはサービスの 概要	昭和30年正伝寺（浄土真宗本願寺派）開基一千年記念法要の記念事業として始めた慈光会。「老後に生きがい」の理念に沿い、高取・上安・東原・石内の4ヶ所を拠点に様々な介護サービスを行なっている。
<p style="text-align: center;">Ⅰ. <取り組み課題></p> <p>当施設のご利用者の殆どは園で最期を迎えられる。還浄後のカンファレンスでは「もっと出来る事があったのでは」という後悔や、「どう関われば良いのかわからない」と不安を抱える職員も少なくない。職員の看取りケアに対する不安は強く、アンケートを実施する。ご本人はもちろん、ご家族も含め「長生きして良かった」と思ってもらえるよう事例を通して看取りケアを振り返る。</p> <p>◎事例（H様 女性 94歳 介護度5） 平成23年8月特養へ入居。平成27年4月経口摂取が難しくなり、胃瘻増設となる。 平成31年4月肺雑やSP02の低下、ゴロ音も聞かれ注入食中止、点滴、抗生剤投与で治療。注入食再開も同様の症状見られ主治医へ上申、平成31年4月20日看取りの診断となる。</p> <p style="text-align: center;">Ⅱ. <具体的な取り組み></p> <p>○ご家族、関係職種で本人の意向を踏まえて、話し合いを行い今後のケア方針、目標を設定。</p> <p style="text-align: center;">（ご本人の想い）</p> <p>ベッドから離れ馴染みの場所へ出掛けたい。 何か食べたい。</p> <p style="text-align: center;">（ご家族の想い）</p> <p>出来る限り苦痛を伴わない最期を迎えてほしい。 多くの時間をお母さんと一緒に過ごしたい。</p> <p style="text-align: center;">（専門職の想い）</p> <p>ご本人、ご家族の想いを叶えたい。</p> <p>上記の内容を踏まえて・・・ 目標①棒キャンディーを味わう。 目標②自宅へ帰り、家族と過ごす事が出来る。</p>	<p style="text-align: center;">Ⅲ. <活動の成果と評価></p> <p>①事前の口腔ケア、アイスマッサージ、吸引器を設置。棒キャンディーを離そうとされず「美味しい」との声が聞かれる。ご本人の思いに応える事ができ、経口摂取を試みる事が出来たことでケアの可能性を感じた。</p> <p>②自宅へ一時帰宅に伴う体調が急変するリスクがあるが、ご本人の「帰る」という意向もあり、ご家族にも協力を依頼、CW、NS同行、吸引器を持参、一時帰宅を実現する事が出来た。自宅に近づくにつれ開眼され、痰の貯留温も無くなり、ご家族にも「ただいま」と言われ笑顔が見られる。</p> <p>○その他にも職員が自主的にできる事（入浴ケア・散歩・他者との交流）を考え実施していくことが出来た。</p> <p style="text-align: center;">Ⅳ. <今後の課題></p> <p>○職員の死生観の育成 ○想いの表出が難しい方へのアセスメント （ご家族より情報収集、入居時から看取りを見据えたアセスメント） ○「看取り期」だからではなく、日々の生活に「その人らしさ」を。</p> <p style="text-align: center;">Ⅴ. <参考資料など></p>

①－3

科学的介護を实践し得る施設であるために

～LIFE 奮闘記～

多職種連携

専門性の向上

専門職間の理解

広島県広島市安佐北区

特別養護老人ホーム なごみの郷^{さと}施設ケアマネジャー ^{なかむら}中村 ^{しずか}静香

生活相談員 廣木 佑介

副施設長 三澤 広隆

E-Mail nagomi@nagominosato.jp FAX 番号 082-841-1336

施設（事業所）
またはサービスの
概要

2002 年 2 月、3 つのフロアで構成された特別養護老人ホーム（入所定員 80 名）、併設ショートステイ（利用定員 20 名）を開設。開設当初から情報共有を重視し、全利用者（約 100 名）の情報を日々、施設全体で共有する体制を実施している。

I. <取り組み課題>

2021 年の介護報酬改定に伴い、科学的介護情報システム＝「LIFE (Long-team care Information system For Evidence) 以下「LIFE」とする」が開始となった。LIFE とは、利用者の情報や介護サービス提供に関する内容のデータを厚生労働省へ提出することと、データ解析によるフィードバックの活用によって、科学的に裏付けられた介護の実現を目指しサービスの質の向上を図る取り組みをするためのシステムである。LIFE を活用することで、根拠に基づく PDCA サイクルの促進や、質の高いサービス提供に繋げることができることとされ、LIFE 活用等が要件に含まれる加算が新設された。この度、LIFE への取り組みを通して、多職種連携の深化と重要性、ならびにケア現場における PDCA サイクルの必要性を改めて認識できたため若干の考察を加えて以下に報告する。

II. <具体的な取り組み>

LIFE において特養で算定可能な加算は 9 つの様式で構成されている。算定に係る入力作業は施設ケアマネジャー（以下、施設 CM）を中心に、以下による担当制を敷くこととした。

施設 CM：①基本項目⑦排せつ支援加算⑧自立支援管理栄養士：②栄養摂取嚥下
歯科衛生士：③口腔衛生管理記録
言語聴覚士・作業療法士：④生活機能チェック⑨ADL維持等加算⑤個別機能訓練計画
看護師：⑥褥瘡マネジメント

実際の入力にあたり、「ADL」評価が「パーセルインデックス(BI)」と「認定調査」の 2 つの指標が用いられていたため、勉強会を通して全担当者で、2 つの指標の詳細な理解と適切な用い方を共有した。次に個別機能訓練計画と自立支援促進とが同一の支援計画では算定不可となる要件であったため、「自立

支援促進」は排せつ動作が自力のできる内容を主として計画し、「個別機能訓練計画」は生活動作練習を主として計画するなどの独自ルールを設定した。そして LIFE への入力は加算の種類により、見直しや入力期間（毎月～6 カ月毎）は異なっていたが、項目内容を精査した結果、各項目に関連性を持たせた仕組みであったことから、1 つの項目内容に変更が生じた場合、その他の項目に影響が生じるため、毎月すべての項目内容の整合性を確認するための情報共有（すり合わせ）が必要であった。

具体的には毎月中旬に施設 CM が各担当者に変更点の有無を確認し、変更があった場合は関連する項目の修正を行った。入退所時や退院時については、随時の変更及び確認を行った。

III. <活動の成果と評価>

1. LIFE への体制（役割分担・入力ルール）を確立したことで関連する加算はすべて取得できている。
2. 入力にあたり 6 名の担当者が入力内容のすり合わせをおこなったことは、互いの専門性を細部に渡り確認できる機会となった。その結果、利用者の状態について根拠を持ってより深く理解することに繋がったと思われ、これまで以上に多職種連携の重要性を認識できた。

IV. <今後の課題>

今回、LIFE の理解と入力体制の確立は一部職員に留まり、ケア現場との十分な共有までには至らなかった。今後においては LIFE とケア現場に乖離がない状況かつ多職種連携を軸に根拠を携えた PDCA サイクルの実践に繋げていくことが肝要となる。

①－4

離床センサー導入による転倒予防

～のぞみ園における成果と課題～

転倒予防

ヒューマンエラー

離床センサー

広島市安佐北区

とくべつようご
特別養護

ひろしまげんぱくようご
広島原爆養護ホーム

くらかけ
倉掛のぞみ園

介護員 藤田 誠司

共同研究者 介護員 今井 春秀

E-mail Address : nozomien@hge.city.hiroshima.jp

Fax 番号 082-845-6934

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

当施設は、原爆被爆者の特別養護施設として、平成4年7月に開設された介護保険適用外の施設である。入園定員は、300名。ショートステイ4名。5階建ての中に、5フロアで構成されている。平均年齢89歳11ヶ月。平均在園期間4年6ヶ月。

I.＜取り組み課題＞

当園では、転倒・座り込みの事故が全体の事故件数の4割を占めています。（令和2年度）

その原因として、当園独自の紐コール（洗濯ばさみ型離床センサー）の不具合、スイッチの入れ忘れのヒューマンエラーが頻回に報告されています。

そこで、入園者が安全で安心して生活できる環境を提供できるように、紐コールの代替品の検討・検証を行い事故減少に取り組みました。

II.＜具体的な取り組み＞

1. 事故集計・分析（令和2年度の事故件数、ヒヤリハットに着目）
2. ヒューマンエラーの削減
3. 入園者の状況に対応した離床センサーの選定・導入・検証

① サイドコール ～対象者：A様

（立位不安定、移乗自立見守り必要）

自身で紐コールを外される行為が頻回にあり、ご自分で車椅子に移乗される。過去にも座り込み事故の報告も多く、転倒リスクが高い為選定する。

② タッチコール ～対象者：B様

（右片麻痺、移乗介助前抱えが必要）

センサーの不発や感知後、訪室するとすでに端座位になっている報告がある。また、紐が気になり引っ張る行為の報告もあり選定する。

③ 超音波・赤外線コール ～対象者C様

（立位可能、移乗動作見守り必要）

自分で紐コールを外され、車椅子やベッドに移乗される。過去に座り込みの事故報告もあり選定する。

4. 検証期間後アンケート実施

III.＜活動の成果と評価＞（成果）

① サイドコール

導入前ヒヤリハット7件→3件へ減少

職員アンケートでは15名中10名が有効と回答

- ・感知が早く、対応も早くなった。
- ・自然な環境で生活できるようになった。

② タッチコール

導入前ヒヤリハット7件→1件へ減少

職員アンケートでは15名中12名が有効と回答

- ・確実に感知対応できるようになった。
- ・センサーの不具合が減った。

③ 超音波・赤外線コール

導入前ヒヤリハット26件→2件へ減少

職員アンケートでは15名中15名が有効と回答

- ・不具合が無くなり、確実に感知し安全になった。
- ・一時停止機能で、スイッチの入れ忘れが無くなった。

（評価）

・3例全てで導入前と比べ、事故0件でヒヤリハットも減少し有効性・安全性が確認された。効率性についても、センサーの設置の工夫により、必要以上の訪室が減り職員、入園者への精神的、体力的な負担も軽減した。

IV.＜今後の課題＞

- ・介護職員への、各離床センサーの使用方法についての講習
- ・離床センサー・オンオフカードの普及活動
- ・個々の状況に合致した離床センサー利用
- ・費用対効果の検証

V.＜参考資料など＞

テクノスジャパン HP

①—5

大切なあなたへ

認知症ケア

優しさを伝える

職員の意識向上

～ユマニチュードで絆を結ぶ～

広島県・広島市安佐北区

とくべつようご
特別養護

ひろしまげんぱくようご
広島原爆養護ホーム

くらかけ
倉掛のぞみ園

介護員 平本 朋子

共同研究者 介護員 山下あずみ

E-mail Address : nozomien@hge.city.hiroshima.jp

Fax 番号 082-845-6934

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

当施設は、原爆被爆者の特別養護施設として、平成4年7月に開設された介護保険適用外の施設である。入園定員は300名。ショートステイ4名。5階建ての中に、5フロアで構成されている。平均年齢89歳10ヵ月。平均在園期間4年6ヶ月。

I <取り組み課題>

・在籍フロアは認知症高齢者の方を対象としたフロアとなっており、個々のBPSDに困惑する場面も多く対応に難しさを感じている。そこで、認知症ケアであるユマニチュードを取り入れ、その効果や職員の言動・心境に変化があるかを考察する。

II <具体的な取り組み>

取り組みの経過

1. 職員へアンケートの実施

(在籍フロア職員20名)

「16名が認知症高齢者のケアに困難さを感じていると回答」

2. ユマニチュードについての勉強会を開催

(申し送り時に10分程度)

3. 対象者A様の選定と実践

【事例対象者A様】

- ・意思疎通が困難で介助を拒否される事が多い。
- ・興奮時は声を荒立て、手が出ることもある。

(具体策)

・ケアを実践し、言動や表情の変化についてノートに記録。

・対応者の声掛けへの反応、5つのステップの自己評価も記載(実施期間1ヵ月)

4. 振り返りと新たな取り組みの追加

◎職員の声や対象者の表情から効果は感じられたが、ノートの自己評価からユマニチュードの理解にバラつきがあると認識した。

↓

・5つのステップを分かりやすくまとめたものをファイリング

・実践での重要点を数か所に掲示

◆A様の変化を実感し、B様を対象に、よりポイントを絞った取組みに挑戦。

【事例対象者B様】

・職員との信頼関係が築けておらず、受け入れてもらえない。

・夜間のパット外しがあり毎晩着衣交換している。(具体策)

・入眠前のトイレ介助(20時)と夜間(0時)にユマニチュードを用い、パット着用をお願いする。

・パット外しの有無を記録しデータを取る。

(実施期間1ヵ月)

5. 期間終了後、職員にアンケートを実施

III <活動の成果と評価>

A様は、興奮することが減り、表情が穏やかになったことで、ゆとりを持って対応できるようになった。

またB様は、職員との信頼関係ができ本人様から視線を合わせることが増えた。発語や笑顔も増え、夜間のパット外しは半減した。

これらのことから、職員自身がその効果を実感し、自然と実践できるようになった。アンケートから、2人の笑顔が好きになったなどポジティブな声を聴き、この事例の成果を感じることができた。

●反省点

・どのような声掛けや対応が良いのか実施期間中に話し合いの場を設けていなかった。活発な話し合いが出来ればユマニチュードの理解度ももっと高くなっていたのではないかと感じた。

IV <今後の課題>

- ・定期的な勉強会の開催
- ・意見交換の場の設け方
- ・職員異動があっても継続できる方法の確立

V <参考文献>

- ・ユマニチュードという革命(誠文堂新光社、阿川佐和子著)
- ・家族のためのユマニチュード(誠文堂新光社、ロゼット・マレスコッティ著)

①— 6

コロナ禍でも家族との繋がりを

コロナ禍

家族との繋がり

生活の質

利用者の笑顔のため私たちにできること

広島県 広島市

社会福祉法人正仁会 ^{しょうじんかい} 特別養護老人ホーム ^{さと} なごみの郷介護福祉士 ^{おおうえ} 大植 ^{みさ} 美沙

介護副主任 寺島 宏之

E-Mail nagomi@nagominosato.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要

特別養護老人ホームなごみの郷は入所定員 80 名であり、併設ショートステイの利用定員 20 名を併せた計 100 名が 3～5 階のフロアに分かれて生活している。2002 年の開設当初より、医療と介護の連携を軸に情報共有を重視した体制の下、全利用者の情報を日々、施設全体で共有し、全人的なケアの提供に努めている。

I. <取り組み課題>

特別養護老人ホームなごみの郷（以下、当施設）では、2020 年 2 月からの新型コロナウイルス感染拡大を受け、2020 年 3 月より、断続的な面会制限を実施している。当たり前であった家族による面会や利用者の外出が大きく制限されるなど、利用者・家族の生活の質に大きな影響を及ぼすこととなった。

新型コロナウイルスの終息のめどがたたない状況下において、今後さらに利用者と家族の繋がりが希薄となることが懸念された。そのため「家族に会えない不安と寂しさを解消する」「再度、利用者と家族に繋がりを実感してもらう」ことを目的に 2021 年 4 月～10 月の期間で「毎月の一筆箋・2 か月に 1 回の写真の送付」と「ドライブ面会」に取り組んだ。

その結果、一定の成果が得られたと考えられたため以下に報告する。

II. <具体的な取り組み>

面会制限を実施して以降「家族に会いたい。」と涙ながらに要望する利用者が増え、家族からも同様の問い合わせが寄せられていた。対面での面会の代わりにオンライン面会やブログに利用者の日々の様子を掲載するなどの取り組みを実施していたが、直接会えないことへのフラストレーションは解消しにくい状況であった。改めて現状の取り組み以外に「家族に会えない不安や寂しさを解消することができないか」「再度、利用者と家族に繋がりを実感してもらえる方法はないか」を 5 階フロアの職員で検討した。

最初に「何をやるのか」を決める「Plan 班」、「どうやってやるのか」を決める「Do 班」、「できているか」を確認する「Check 班」の 3 チームを構成した。取り組みの成果を確認するため、「対象家族の満足度 100%」と「他のフロアでも取り組める、再現性の高い実施方法の確立」を目標とした。各班は取り組みを整理・確認できる書式を作成した上で、毎月のミーティングで「誰が」「いつ」「何を」「どうやるのか」などの検討や進捗確認を行い、職員全員で共有するようにした。各班で検討を重ね、2021 年 4 月より、以下の取り組みを行った。

①家族への、毎月の一筆箋、2 か月に 1 回の写真送付
一筆箋・写真の作成は各利用者の担当職員が行うこととした。一筆箋には利用者の直近の様子などを 200 文字程度で記載した。外国人技能実習生も関わったが日本語での作文が苦手であったため、作成後に他の職員がフォローするようにした。送付する写真は、同じ写真を送って送ることがないように、送付月内で撮影したものを送付するルールを設けた。

②ドライブ面会

職員が利用者を車に乗せて家族のもとに行き、車のガラス越しに面会するようにした。

対象者は「寂しいと涙していた利用者」「コロナ禍以前には毎週頻りに家族が面会に来ていた利用者」とした。面会時には「降車不可・接触不可・マスク着用」のルールを設け、事前に対象者家族の同意を得て実施した。

III. <活動の成果と評価>

①毎月の一筆箋、2 か月に 1 回の写真送付は 2021 年 10 月までで延べ 185 通実施した。実施当初、家族からのリアクションはなく、不安の解消に繋がっているのか不明であったが、3 か月目には家族から返信の手紙が届くようになった。返信の手紙は都度、利用者へ手渡した。読むことが難しい利用者には職員が代読して家族の想いを伝えた。利用者からは「元気にしてるんじやね。」「安心したよ。」「と声を聞くことができた。すべての家族から返信があったわけではないが、家族との繋がりを実感できるきっかけになったのではないかと考える。また、返信の中には職員へのねぎらいの言葉が書かれたものもあり、利用者と家族だけでなく、家族と職員の交流も深まったように感じられた。

②ドライブ面会は 9 月に 3 名、10 月に 2 名の合計 5 名の利用者に実施した。親類縁者総出で迎える家族、お土産を用意している家族と様々であった。久しぶりにお互いの元気な姿を目の当たりにした利用者、家族双方には笑顔が溢れ、嬉し涙を浮かべながら何度も何度も感謝の言葉を交わす様子が印象的であった。実施後、家族にドライブ面会について「1. とても良い 2. 良い 3. どちらともいえない 4. もう一工夫して欲しい」の 4 件法にてアンケート調査を行った。結果は全員が「1. とても良い」を選択したこと、高い満足度を得られたと思われる。また、降車不可等の一定の条件下による実施であったことについても「1. しょうがない 2. どちらともいえない 3. もう一工夫して欲しい」の 3 件法にてアンケート調査を行った。その結果、全員が「1. しょうがない」を選択しており、面会手法についても一定の理解は得られたと思われる。また、同行した職員が作成した実施報告書には「取り組んで良かった。」「感動した。」などの記載があったことから、職員にとっても充実感の得られる取り組みであったと思われる。

IV. <今後の課題>

2021 年 12 月には感染者数の減少に伴い、一定の条件下で施設での面会を再開した。しかしその後も感染状況に応じて中止と再開を繰り返しており、利用者と家族が会う機会は依然として少ないままである。一筆箋と写真の送付は他階フロアでも定期的な実施できるようになったが、ドライブ面会は 1 回のみの実施にとどまっている。今後も当施設全体の取り組みとして継続しつつ、よりよい方法を模索していきたい。

①－ 7

災害時に電子記録システムを活用する
ために

災害対策

電子記録システム

リスク管理

広島市東区

とくべつようご
特別養護ひろしまげんぱくようご
広島原爆養護ホームかんだやま えん
神田山やすらぎ園

介護員

ふじい
藤井あきひろ
玲廣

共同研究者 大出 拓也

E-Mail Address : yasuragien@hge.city.hiroshima.jp FAX 番号 : (082) 221-5985施設（事業所）
またはサービスの
概要当施設は、原爆被爆者の特別養護施設として、昭和 57 年 6 月に開設された介護保
険適用外の施設です。入園定員は 100 名。平均年齢は 90 歳 3 ヶ月。

Ⅰ. <取り組み課題>

・近年多発する災害の前に、施設での災害対策を見直してみました。電子記録システムなど、デジタル化に取り組んでいるのに、災害時は活用できない前提になっています。災害時でも電子記録システムを活用することが、デジタル化している介護の災害対策になります。

Ⅱ. <具体的な取り組み>

1. 自然災害

広島県内の過去の自然災害と土砂災害の発生件数を調べる
西日本豪雨と東日本大震災地震のライフラインの復旧日数を調べる

2. 現状の災害対策の把握

「火災等危機管理マニュアル」の見直し
「自然災害発生時における業務継続計画」の見直し
備蓄の見直し
防災用品の分散化

3. 非常用自家発電の定期点検

年 1 回の定期点検で防災職員と確認をする

4. LAN 会議

年 1 回開催の事業団 3 園の定期会議に出席し、議案を提出する

Ⅲ. <活動の成果と評価>

(成果)

ホームルーターやポータブル電源を活用することで、災害時でも電子記録システムを活用できる可能性が高い。

(評価)

1. 近年は土砂災害が増加傾向、ライフラインは電気が一番早く復旧される
2. 備蓄確保や防災用品の分散化やマニュアル改正には随時取り組んでいるが、デジタル化には対応できていない
3. 停電時の非常用自家発電は、非常灯とエレベーターの使用のみ、電子記録システムは使用できない
4. 現在の災害対策では、電子記録システムを活用できない為、ホームルーターとポータブル電源の購入の打診

Ⅳ <今後の課題>

- ・現状、固定回線だけの Wi-Fi で、日常は対応できているのに、災害時のみの為に、追加で携帯回線の導入は難しい。日常でも活用できることでランニングコストの分散化がはかれるのではないか

Ⅴ <参考資料など>

ひろしまマイ・タイムライン「風水害を知ろう」
日本気象協会「知る防災」危機回避.com「内閣府
防災情報ページ参照」国土交通省国土地理院画像
毎日新聞画像 日テレニュース画像

②－1

記録のデジタル化

ICT の導入

記録の電子化

働きやすい職場環境を目指して

広島県 広島市

養護老人ホーム かみやすじこうえん
上安慈光園

生活相談員

まつだ よしふみ
松田 伝史

E-mail Address : yougo@jikkouen.jp

Fax 番号 : 082-878-8711

今回の発表の施設
またはサービスの
概要

施設名：養護老人ホーム上安慈光園 定員：60名 開設：昭和30年8月

併設：デイサービスセンター、訪問介護事業所、認知症型デイサービス、居宅介護支援事業所

<取り組み課題>

- ・利用者の重度化
- ・介護の必要な利用者の増加
- ・記録にかかる時間の減少

<具体的な取り組み>

- ① デジタル化する上での不安感の把握する為、アンケートをとる。
- ② 記録をパソコンやタブレットからの入力方法にする為、外部からの勉強会で知識やスキルの勉強をする。
- ③ 一度にすべての記録をデジタル化していくのではなく年間を通して徐々に増やしていく。
- ④ 良かった点と悪かった点についてアンケートを取り振り返る。

<活動の成果と評価>

- ・タブレット一つでどこでも情報が見られるので記録をするのに場所を選ばなくなった。
- ・定型文を事前に作成しておくことで記事の入力の大幅な時間短縮に繋がった。
- ・時間が空いた時に手軽に入力できる。
- ・利用者との関わる時間や他の業務に取り掛かりやすくなった。
- ・ご利用者の情報をまとめて見れるようになった。
- ・一度入力するとあとはそれぞれデータ内で記録を分けることが出来るようになった。

<今後の課題>

- ・業務、夜間の日誌等記録を全てタブレットから入力することが出来ない。
- ・パソコンの文字打ちや操作が分からない職員がいるので導入が難しい。

②－2

「昔とった杵柄で」いつもの私

「今」も現役

介護職員の気付き

認知機能のトラブル

～誰かが呼んでるよ～

広島市安佐南区

(認知症対応型共同生活介護) グループホームじこう

ケアワーカー たつかみ 立上 ちづ 智津

共同研究者 ケアワーカー 上岡 良子

E-Mail Address : jikoukai@jikouen.jp

Fax 番号 : 082-878-8037

施設(事業所)
またはサービスの
概要

昭和30年、正伝寺(浄土真宗本願寺派)開基一千年記念法要の記念事業として始めた慈光会。「老後に生きがい」の理念に沿い、高取、上安、石内、東原の4カ所を拠点に、様々な介護サービスを行っている。

I. <取り組み課題>

<課題の整理: 取り組み当初>

お一人の世界で独語が続いている→職員と目を合わせられず、職員の言葉も届かず、入浴、服薬の拒否みられる→気分の浮き沈みがみられる→部屋にて転倒され第三腰椎圧迫骨折。以降、痛みから安静保てず、行動が広く激しくなれる→主治医へ最近の症状を報告する。家族様へ報告→活動的な躁状態と憂うつで無気力な状態を繰り返す中、雨降りでも外へ意識が向くと出て行かれる等→認知症疾患医療/精神科へ受診のご意向確認。 対応困難な事例に対し、専門性を高め、より理解を深める→解決方法を見出す

II. <具体的な取り組み>

- ・ 生活歴を中心とした家族への情報収集
- ・ ひもときシートの実施～職員アンケート前期
- ・ 課題抽出から具体的な対応
- ・ 所在不明の要因と課題分析
- ・ 時間軸でのK様の視点による対応

発生時間	場面	状況	言動行動
8:30～9:15	※詳細はスライドを		
14:00～15:00	ご参照ください		

- ・ ひもときシートの実施～職員アンケート中後期
- ・ 認知症勉強会の実施(認知症世界の歩き方参照)
- ・ 認知症ケア理念と目標設定

III. <活動の成果と評価>

【成果】私達の道標であり目的である「老後に生きがい」の理念は毎日申し送り時に職員で唱和することにより、意識付けと方向性は常に共有しております、更なる連携とケアの質向上を図り、目標達成に向け、ご利用者の視点で理解を深められた。

【評価】認知機能のトラブルを理解できる人材が少しずつではあるも、今回の取り組みを通し成長できる土台がつくれたことを何よりの評価と考えます。

IV. <今後の課題>

ご利用者の行動心理症状について理解を深め、解決方法を見出していくと言う、課題に取り組んで参りました。更なる認知症ケアの質向上を目指す上で、心と身体に抱えるトラブル・障害をベースに、「ご利用者一人ひとりの視点で理解を深め、実践できる人材の育成」を今後の課題としております。

※資料掲載の写真は事前に承諾を得ております

【参考文献】(引用)

- ・ ひもときシート ～認知症介護実践研修
- ・ ユマニチュード入門 医学書院
- ・ 認知症世界の歩き方 ライツ社

②－3

五感で触れる時間の共有

季節感

五感

昔懐かしさ

ホットー息つける入浴を

広島市 安佐南区

じこうえん
慈光園訪問入浴介護事業所

ケアワーカー

かねだ しゅうじ
金田 修司

共同研究者 山元 初美

E-mail Address : jikoukai@jikouen.jp

Fax 番号 : 082-878-8037

施設（事業所）
またはサービスの
概要

昭和 30 年 2 月社会福祉法人慈光園設立。平成 7 年 2 月 1 日慈光園訪問入浴介護事業所設立。「老後に生きがい」を基本理念として、安佐南区を中心に、広島市全域を対象にサービス提供している。

I. <取り組み課題>

当事業所のご利用者様の多くは介護度・障害自立度が共に高く、通所サービス等の利用も困難であり、外部の空気に触れる事が難しい方がおられます。その中には、看取り診断された方もおられ、離床困難で多くの時間をベット上で過ごされておられます。そんな中、当事業所として何かお力になれないか・・・一時間という短い時間の中でよりリラクゼーション効果を高めて頂く事を目的とし「転地効果」「季節湯」を取り入れ、更に個性を高めていく事でニーズに応じたケアに力を入れ昔感じた想いを再び感じて頂けたらと思い取り組み開始に至りました。

II. <具体的な取り組み>

- ・五感の刺激となる「転地効果」を活用
 - ・各月の季節湯を実施しながら個別対象とした取組の実施
 - ・「視覚的效果」「嗅覚的效果」の2パターンを準備
- 対象者の状態・状況に応じ都度対応

「視覚的效果」

A様 女性 92歳 要介護度5
既往歴：H6～関節リウマチ H24～認知症
H29～両膝関節屈曲拘縮
主介護者：息子様
趣味：料理 旅行

「嗅覚的效果」

B様 女性 90歳 要介護度4
既往歴：H29～圧迫骨折 R3ヘルニア

III. <活動の成果と評価>

対象者の機能に応じ、季節湯の提供方法を変更しより季節感・リラクゼーション効果の向上に取り組む。

「視覚的效果」・・・桜・柚子・紅葉

「嗅覚的效果」・・・カモミール・みかん・キンモクセイ

視覚・嗅覚共に以前に増した効果が得られた様に感じます。表情・発語・瞳孔の動き等普段みられない表情を伺え、ご家族と共有出来たのは取組の評価に値すると思います。状態の低下=反応がみられない・・・では無く様々な視点からアプローチしていく事で対象の方との距離は近づいたように感じました。看取り期・長期療養されている方へのモニタリングを深く取り組む事で支援内容にも変化が生まれ、より個性を高める事が出来ると思います。

IV. <今後の課題>

今回の取り組みでは、視覚・嗅覚的效果を高めリラクゼーション効果を高め、数値では測れないその時々のご利用者様の表情や声を感じる事が出来ご家族様と時間の共有が出来た事は良い結果となりましたが、今後の課題とし、数値化可能な素材の活用を実践し身体的効果も視野に入れ取組を継続していきたいと思います。

又、身体痛・入浴拒否の強い方への取り組みとし背景に触れ本人様の応じた取り組みを提供する事で不安・苦痛の軽減に努めていきたいと思います。

V. <参考資料など>

②－4

スキンテア予防へ向けた意識改革

入居者が安全・安心に過ごせるために

介護方法の統一

事故報告書

スキルアップ

広島市

グループホーム なごみの郷亀山^{さとかめやま}介護福祉士 田中 愛美^{たなか あいみ}

介護福祉士 脇田 良樹

管理者 廣森 靖司

E-mail:kameyama@nagominosato.jp

施設（事業所）
またはサービスの
概要

平成 16 年に開設し、認知症対応型共同生活介護サービスを提供している。2 ユニットで構成されており、定員は 18 名である。事故発生時にはその都度、事故原因や対策を介護職員が検証し、再発防止に努めている。

Ⅰ. <取り組み課題>

グループホームなごみの郷亀山（以下、当事業所）では、令和 2 年度の事故報告のうち内出血・皮膚受傷（以下スキンテア）が半数以上を占めていた。スキンテアの予防のため、スキンテア委員会を立ち上げ、介助方法の統一、事故報告書の変更、スキルアップに取り組んだ。その結果、職員のスキンテアに対する意識が向上したと思われたため、以下に報告する。

Ⅱ. <具体的な取り組み>

令和 3 年 4 月に、スキンテアに対する情報収集や、介護職員（以下、職員）への発信を行うことを目的としたスキンテア委員会（以下、委員会）を設立した。委員会ではまず、今後の方向性を決めるために、スキンテアに対する職員の意識調査アンケートを作成し、当事業所の全職員（17 名）に実施した。アンケートの内容は「スキンテアについて説明できますか」「スキンテアが増加している認識はありますか」「スキンテアが増加している原因」「スキンテアを減らすためにはどうしたらよいと思いますか」「スキンテアの情報を共有するために何が必要だと思いますか」の 5 項目とし、それぞれ選択式と記載式を用いて回答してもらった。

その結果、1. 介助方法が統一されていない、2. 事故報告書がわかりにくい、3. スキンテアに対しての知識不足、という 3 つの課題が挙がった。そのため、委員会で 1～3 に対して以下の計画を立案した。

1. 介助方法が統一されていないことについて

入居者ごとに、ADL、介助方法等を記載した入居者状況表を作成した。表にはスキンテア患部の写真を添付する等、細部まで記載できるように工夫した。また、2 週間毎に状況の変化の有無を確認し、更新の都度、カンファレンスを行うこととした。

2. 事故報告書が分かりにくいことについて

これまでの事故報告書は、発生原因や状況等を、全て文字で記載していた。しかし文字のみではスキンテアの発生部位が分かりにくく、発生部位の書き方も職員によってばらつきが散見された。そのため、スキンテアに関しては、発生した箇所を人体図に直接記載する、スキンテアに特化した報告書を作成することとした。使用開始後は職員に意見を求め、より分かりやすくなるように変更を重ねることとした。

3. スキンテアへ対しての知識不足について

月に一回、職員が一同に会するミーティングで勉強会を継続的に開催した。内容は、スキンテアの発生要因やその対応に関する基本的な知識や、体重移動の原理や原則に基づいた移乗介護技術とした。

Ⅲ. <取り組みの成果と評価>

5 カ月後、スキンテア報告書件数は 38 件から 107 件へ増加した。また、職員のスキンテアに対する認識の変化を把握するため、事後アンケートを実施した。質問項目は「①スキンテアに対して職員間で話す機会は増えましたか」「②スキンテア報告書を変更して、報告書を書く機会は増えましたか」「③日々のかかわりで、身体状況の観察をすることは増えましたか」「④発生したスキンテアに対して、対応策を提案できていますか」「⑤発生したスキンテアについて、他の職員と共有できていますか」「⑥スキンテアを減らすには私たちに何が必要だと思いますか」の 6 項目とした。①は 70%以上の職員が「はい」と回答し、③⑤も 80%の職員が「はい」と回答した。委員会を発足して職員のスキンテアに対する意識啓発を行い、入居者状況表を用いた介助方法の統一、スキンテアの発生部位等をわかりやすくするため事故報告書の様式の変更、勉強会の開催による職員のスキルアップを行ったことで、どうしたらスキンテアを予防できるのか、どのようなケアをしたらよいのかを考えながら入居者へ関わるようになった結果だと考える。

スキンテア報告書が減少しなかったことについては、介護技術や知識がいまだ不十分であることが原因と思われるが、職員がスキンテアに対して意識を持って関わるようになった結果、これまでは気付かなかったスキンテアに気付くようになったとも考えられる。以上のことから、今回の取り組みは、スキンテアに対する職員の意識を向上させるきっかけになったと考える。

Ⅳ. <今後の課題>

今回、職員のスキンテアに対する意識を向上させることはできたが、スキンテア発生件数の減少には至らなかった。今後も取り組みを継続し、入居者に安心・安全なケアを提供していきたい。

②－5

動けるようになって地域活動に参加したい！

～本人の目標を叶えるために～

障害受容

訪問リハビリ

多職種連携

広島市中区

ゆうゆうたうんもとまち

悠悠タウン基町訪問看護ステーション

理学療法士 さいとう かな 齋藤 花菜

理学療法士 水上 雅博

作業療法士 橋本 真依

E-Mail Address m-town@yuuyuu.hiroikai.or.jp FAX 番号 082-502-7966

施設（事業所）
またはサービスの
概要

社会福祉法人福祉広医会が広島市中区基町に平成 15 年 1 月に開所。訪問介護事業所・居宅介護支援事業所・訪問看護事業所・デイサービスセンター・小規模多機能型居宅介護・地域包括支援センター（広島市より委託）を併設している。

<取り組んだ課題>

病前は社会的で地域活動も積極的に行っていた方が、脳出血発症後、入院期間を経て車椅子レベルで退院。障害を負いながらも今までのような暮らし、人との交流を望み、その目標に近づいた症例を報告する。

<倫理的配慮>

発表にあたり、患者の個人情報とプライバシーの保護に配慮し、家族から書面にて同意を得た。

<対象利用者>

A 氏 70 代男性。視床出血後遺症（左片麻痺）要介護 3。日常生活自立度 B1 認知症自立度 I Demand：動けるようになって地域活動に参加したい。

<具体的な取り組み>

【第Ⅰ期】訪問リハビリ介入時

- ・起居、床上動作に介助必要
 - ・活動量が減り、体力、歩行能力低下
 - ・常に見守りを要し、家族の介護負担増加
- 起居、床上動作を中心に介入。福祉用具導入検討（ベッド、置き型手すり提案）

【第Ⅱ期】福祉用具導入後

- ・起居、起立動作自立
 - ・生活上の日課や役割などもなく、達成感や充実感得られず
- 担当者会議で運動型のデイサービスを提案

【第Ⅲ期】サービス追加後

- ・体力、歩行能力向上し、トイレまでの移動自立
 - ・他者との交流機会ができ、心身安定、意欲向上
- A 氏の目標に沿い、リハビリで歩行距離拡大

<活動の成果と評価>

Ⅰ期では心身機能、環境因子、家族の介護負担に着目して介入。動作指導を支援者側で統一して行った結果、動作定着が難しく福祉用具の提案に本人も納得される。

Ⅱ期では個人因子となる A 氏の社会的な性格、参加に焦点を置くと、日々の活動量や社会的交流が減少していることが分かる。訪問リハビリだけの介入では参加の充実が難しいため、多職種に発信し間接的な幅の支援を広げていく。

Ⅲ期では心身機能が安定し、基本動作能力が向上したことで最終目標を視野に入れて介入することができた。歩行距離を徐々に拡大していくことで、達成感も得やすくモチベーションの維持、目標につながりやすい。

ICF に基づき総合的に評価を行なう事で問題点や今後の課題を抽出しやすい。

<今後の課題>

訪問リハビリは専門的視点を活用し、目標設定を明確にした上で主体的に多職種に発信していくことが重要だと感じた。

利用者が望む暮らしに近づけるよう、本人・家族の想いを具体的に聞き出し、寄り添った支援を心がけていく。

<参考文献>

- 1) 日本訪問リハビリテーション協会 HP
- 2) 鈴木 修, 三浦裕司：訪問リハビリテーションの開始から終了までの流れ. 日本訪問リハビリテーション協会・編, 新版訪問リハビリテーション実践テキスト, 青梅社

②－6

いざ！という時のために

事前防災

地域共生

他職種連携

チームで支える防災

広島市安佐南区

かみやすじこうえん

上安慈光園 訪問介護事業所

介護職員 よしむら こはる
吉村 小春

共同研究者 竹内 智恵子

施設（事業所）
またはサービスの
概要

昭和 30 年開設の慈光会。「老後に生きがい」という理念に基づき、ヘルパー13名で、自宅で安心して生活していただけるようご利用者に介護保険サービス、障がい福祉サービスを行っている。

Ⅰ. <取り組み課題>

近年、国内で多くの災害が起きている。広島では2014年の緑井・八木の土砂災害や2018年に西日本豪雨があり、この災害では当事業所のヘルパーの中にも被災者がいた。このような災害をうけ、災害に対する危機意識が高まり防災について考える事となった。この活動は3年間行っている。

昨年度までの取組みで、土砂災害危険区域にお住まいの利用者数を確認し、災害時に配慮が必要な利用者に対して「非常持出袋」を作成してきた。

【課題】

- ・大規模災害の多くは土日や深夜帯に起こっており、災害はサービスを利用していない時間帯に起こる可能性が高い。
 - ・高齢者は身体状況から避難行動が難しく、過去の災害でも自ら避難行動をとる人が少ない
- これらのことから、日頃からご家族や地域と交流を深め、他職種も含めチームで支える「見守りのしくみ」を作っておく。

Ⅱ. <具体的な取り組み>

○「ひろしまマイ・タイムライン」の活用

広島県が推奨する、「いつ」「だれが」「何をするか」を時系列にまとめたもの。利用者と一緒に作成し、家族や地域、他職種と連携を図る。

<事例>

- ・Y様 女性 94歳 要介護1
- ・独居 息子様が他県在住
- ・介護サービス ヘルパー週2回
デイサービス週3回
- ・歩行が不安定であり一人で避難が困難
- ・近所に
- ・避難経路に危険区域がある
- ・自宅に「非常持出袋」を準備している

Ⅲ. <活動の成果と評価>

今回の事例を通して、ヘルパーだけで行うのではなく、ご利用者やご家族、ケアマネジャー、地域と一緒に活動することで防災について協力・共有することができた。また、それぞれが役割を持ってチームで支える体制ができ、課題であった「見守りの仕組み」をつくることができた。

この取組みにより、ご利用者の安心に繋がったことや、ご近所のT様のような社会資源を確認できたことは大きな成果となった。

Ⅳ. <今後の課題>

ヘルパーは地域に訪問するという特徴を活かし、今後は民生委員や地域と繋がりを持ち、他の地域でもチームで支える見守りの仕組みを作っていく。

Ⅴ. <参考資料など>

- ・土砂災害ポータル広島
- ・広島市ハザードマップ
- ・広島県「ひろしまマイ・タイムライン」
- ・「訪問介護事業所のための防災・感染症BCP対策講座」山口県訪問介護事業所連絡協議会 主催

審査員

令和4年度事例研究発表会 審査員一覧（老施連研修部会）

（順不同・敬称略）

分科会 (施設種別)	担当施設長氏名	施設名
① （特別養護老人ホーム）	栗栖 正樹	（特養）三篠園
	織井 智靖	（特養）亀山の里
	中井 満利子	（特養）虹の里
	熊澤 吉起	（特養）サンヒルズ広島
	西山 京文子	（特養）広島八景園
	藤井 尚三郎	（養護）上安慈光園
	山根 昌子	（特養）菜の華
	城谷 和代	（特養）友愛園
	岩崎 静二	（特養）やすらぎの里 広域公園
	松村 真由美	（特養）新都西風苑
	松田 圭太	（特養）可部南静養園
	鞆工 裕一	（特養）くちた園
	上田 辰彦	（特養）やすらぎの里
	村上 栄	（特養）湯来保養園
② （養護老人ホーム・在宅サービス）	渡部 貴則	（特養）悠悠タウン江波
	武村 英典	（養護・特養）寿老園
	上田 佳弘	（原爆）舟入むつみ園
	内山 偉文	（原爆）神田山やすらぎ園
	尼崎 徹郎	（特養）へさか福寿苑
	横山 輝代子	（特養）でじま・くにくさ
	山本 亮介	（養護・特養）千歳園
	齊藤 清	（特養）ともの家
	柏 明宏	（特養）春日野園
	河野 隆典	（ケア）ふれ愛
	野間 久司	（養護）三篠園
	根波 リエ子	（特養）あきなかの、（ケア）安芸中野 （デイ）れんげ
	藤田 成人	（特養）第二いこいの園
	松井 誠	（特養）陽光の家

「MEMO」